

『こころ』座談会「貴方とあなた」 池 福郎—目 次郎—高田の婆

次郎：きょうは、夏目漱石作『こころ』のひとつの表現について考えてみたいと思います。漱石が使う漢字は当て字が多く、それを単なる「間違い」と解釈する人もいますが、僕はそう思えない。よく見ると意味に則して使っているし、特別な意味を込めて当てている場合もある。そして時には同じ漢字に違う振り仮名が振ってあることもある。だから文字の使い方にこだわった人だと思えます。そこで気になるのが、先生が「私」に対して使う漢字の「貴方」と平仮名の「あなた」です。同じ人間に対して漢字と平仮名を使い分けているってどういうことでしょうか？

婆：そもそも漢字の「貴方」は遠方を指す「彼方（かなた、あなた）」という言葉から発した二人称でしょう。だから距離感を表したんじゃないかな。漢字の「貴方」は先生に近い存在の「私」で、平仮名の「あなた」は先生とかけ離れた存在の「私」だと思う。漢字の「貴方」は親しみを込めた目下に対する呼びかけだから、それを使った時は男としての先輩から後輩に対する呼びかけ、平仮名だったら分かり合えない女同様の新人類男に対する呼びかけかな。静さんが「男と女の心はひとつになれないものか」と言っているように、漢字の「貴方」なら、男として先生のことを理解できるかもしれないけれど、平仮名の「あなた」には理解できないかもしれない、ということじゃないかしら。

福郎：そうですね。戦争をくぐり抜けて「死そのもの」を真剣に考えた旧世代の男と、自分の好き勝手に生きられる感覚で、西洋化した新文明の華を追いかける新世代の男には距離がある。

次郎：すると先生は旧世代の男で、「私」は新世代の男ですね。

福郎：そう。そして「天皇に尽くす」明治の精神を担って自分の意思を抑制しつつ貫いた乃木大将は旧世代の男で、一貫した男の生き方よりも「殉死」という死に方を批判したり、自分の主義なく真似して死んだりしたのが文明病に罹った新世代の男。ところで小説冒頭で「君」だった「私」が、先生と実際の交流を始めた時から漢字の「貴方」と平仮名の「あなた」になったところにも注目してください。つまり男同士の本格的な心のふれ合いが生じた時点から二人の思想の距離が描かれている。もうここから結末の「時勢の推移から来る人間の相違」「個人の持って生れた性格の相違」ということを織り込んでいます。そして最後に、乃木大将が死んだ理由が、同じ戦時下に生きながら少し年代の違う先生に解らないように、時代観を異にする新人類である平仮名の「あなた」に先生の「自殺する訳」は分らないかもしれないけれど、同じ「男」としての漢字の「貴方」に解らせるように叙述したつもりだと述べる。

次郎：あ、そうか。単調な生活を続けながら、常に内面では苦しい戦争があつて、死だけが道を開けていたって先生的生活は、乃木大将の35年のことなんだ。実際の戦争が終わっても心の中の戦争は終わらなかったということ、男としての漢字の「貴方」に解るように叙述したってことか。自分の意思に反してかつて交友を結んだ人を死に至らしめたことの苦悩をどこまで理解できるかですね。そういう「人間の罪」をね。それにしてもすごいと思うのは、先生の遺書の主要メッセージは漢字の「貴方」で、最初の部分と「あなた限りに打ち明けられた私の秘密」という最後の部分は平仮名の「あなた」になっているところです。その「あなた」は「私」という青年一人のはずなのに、新人類の平仮名の「あなた」である読者全員にも語りかけたことになる。読者はみんな自分一人だけに打ち明けられたように感じて印象を深めるでしょう。人は秘密を手に入れたがるものだから。牛のように人を押す漱石ってやっぱりすごいですね。

婆：そうね。そして「金と恋」に関わる「人間の罪」も、これから社会に出て金の競争をして恋を経験する若者の心に残ったでしょうね。heartを掴んでmindに影響を及ぼしたと思うわ。

福郎：最後にもう一つ。東京にいる「私」は常に先生のこと頭がいっぱいだったけれど、親元に帰った「私」は先生のことを忘れていた。そんな平仮名の「あなた」だから、対面して言葉で語りかけても心が通じなかったんだね。けれど死という「事実」を示した相手不在の遺書によって、平仮名の「あなた」は漢字の「貴方」になれた。人間は失わないと気づかないものだね。